

「『週刊金曜日』への投書」

2018年10月01日

9月28日付け『週刊金曜日』に私の投書が「投書欄」に掲載されたので、転載したい。

「共感を呼び起こす編集を」

『週刊金曜日』を創刊号から読んで、多くを教えられ、感謝している。

読者が作る週刊誌と言われ、『週刊金曜日』が主催する集会は会場に入り切れないほど参加者が多かった。最近では、廃刊の危機が迫るほど、読者数が減っているとのこと。残念である。

しかし、さもありませんかと思う節もある。編集者の視点が高みからではないか。人間と社会と世界に対する自分たちの見方と分析は正しい、それに基づく社会と世界のあり方を示す方向性は正しい、このことを理解しない者は愚か者だ、右傾化した時代、自分たちの主張はなかなか受け入れられない。それでは、ついてゆけない。

私たちは日常、テレビを観ながら夕食をとっていることが多い。テレビでは、シリアの子どもたちが残酷に殺されている映像、その他にも、惨たらしい死の様の映像が流される。報道であるから悲しい事件が多いのは当然であるが、それらを観ながら、晩酌をしている。自分と映像の間にまったく共感性が持てない。

フランスの哲学者・シモーヌ・ヴェイユは子どもの頃、中国は貧しく、子どもたちは飢も食べられないと聞いて、「じゃ、私も食べない」と答えたという。彼女の共感力に驚愕した。

『週刊金曜日』には相手に一言の反論も許さない、めった切りにする文章がある。もちろん、そうしなければならぬ場合もあるだろう。しかし文章は、読んだ者が自らを恥じ入り、新たな地点に立つように促すものではないか。

秋田のジャーナリスト・むのたけじ氏の文章は、生きるための大きな勇気を与えてくれる。水俣病患者と向き合った石牟礼道子氏の文章に触れると、生きることが愛しくなる。2人は、貧しく、弱く、死に逝く人々と出会い、共感し合いながら、文章を紡ぎ出したのではないか。

8月31日号の「米騒動“女一揆”から100年 女の怒りが歴史を変える!」を興味深く読んだ。女性の生きる場と権利を求めて、命を賭して闘った女性たちに脱帽。男中心で生きてきた自分を恥じ、可能な限り、女性の声を聞き、仲間に加えてほしいと思った。言葉が人をつなぐ。共感し難い現代にあって、共感を呼び起こすような編集を期待したい。共感こそが、持続する連帯を生み出すと思う。